
GATE

杉 御零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GATE

【Zコード】

Z5528Y

【作者名】

杉 御零

【あらすじ】

普通ではない力を持つていた富野 修治は、ある日“魔物”に襲われる。そこを美少女に助けられ、GSSCという組織の存在を知る。修治は自分の力が“魔物”を惹き付ける事を知られ、組織に勧誘されるも、それに応えられない。だがついに、修治の学校にゲートが出現し。。。 戦闘パート、日常パートあり。基本、チート主人公です。ハーレム予定。不定期更新です。

魔物襲撃　え、マジで？

キー口、キー口、キー口。

午後10時過ぎ公園。只今俺は「コンビニの帰りでなんとなくブランコを漕いでいる。

暗い公園に響く音が地味に怖い。

俺の名前は宮野 修治。みやの しゅうじ高校1年生で近くの天野岩屋高校あまのいわやに通っている。通っている身ながら凄い名前の高校だと思つ。

ーーと、一人語りに入りかかる。

ふう、危ない所だつた。

またなんとなく辺りを見渡す。

すると、現実に意識が復帰した事で目の前の異変に気付く。

俺の正面のあたりの闇が渦巻いていた。

よく見ようと目を凝らすが暗くてよく見えない。

そうしている間も闇は渦巻きながら大きくなつていた。

俺の本能はガンガン警鐘を鳴らしている。

が、やはり好奇心の方が上回った。
やつぱり氣になるよな、こういうの。

そんなんで、観察する事にした。

しかし、闇は予想以上に大きくなつた。

最初、地面から膝くらいまでだったのが、既に3m程にまでなつていた。

どこまでテカくなるんだ？

もう帰ろうかなー。そう思い始めた時だった。

闇の中から何かが現れた。

それは始めはぼんやりとした輪郭だけだった。だが、次第にくつきりとしてきて、最終的にそこに現れたのは巨大な門だった。

2m強の巨大な門。

公園にあるにはあまりに異質な物だった。

数秒間固まつた。

無理もないと思う。言い訳をする訳ではないが、この状況で冷静な奴の方がおかしい。だから俺がフリーズしてしまったのも仕方がない筈だ。

たとえそのせいでの後に起こった事に対処出来なかつたとしても。

ギイイ

門が開いた。

それに——ヤバい、なんか魔物っぽいのがwww　じゃなくてわらわら湧いて出て來た！

魔物達はすごく強そうだ。動物っぽい奴もいるが、明らかにこの世界の生物ではない異形も見受けられる。

「ママンド、逃げる。

しかし、回り込まれてしまつた！

コマンド、戦う。しかないか、嫌だけど。

「グルオツ！」

イノシシの様な魔物が吠えて突っ込んできた。イノシシだから突進つて、愚直だな。

さて、どうするか。

相手はイノシシといつても化け物だ。突進も見たところ最低でも100km/hくらい速度がでている。まともに食らつたらマズい。

しようがない、奥の手を使うか。出来れば使いたくなかったんだが、今はそうも言つてられまい。

「プロテクト！」

俺がそう発声すると、青白い盾が現れて俺を守る。
突っ込んできたイノシシは頭をぶつけて砕けて死んだ。　まず
一体？

まあ、イノシシの事は兎も角、この障壁精製が俺の能力だ。

門の方を見やると更に魔物達が湧いてきていた。
俺は魔物達に向き直つて見据える。

「っしゃあ、どんどん掛かつてこいやつ！」

魔の群 一匹見たら即死と思えー？

20分後。

「ぜえ、はあ。くそつ、もう無理だ！」

結局、200匹程殺した所で俺は勝てないと悟った。

何故かつて？

いや、だつて卑怯だろ敵。殺しても殺しても湧いてくるし。

という訳で現在、能力でドーム状の防護壁を造つて籠城中。
俺は自分の能力には自信がある。

この壁は滅多な事では壊れないと思つていて。

壊れないとは分かつてはいるが、分かつていても、障壁に張り付いてくる魔物を見ていると生きた心地がしない。
俺の障壁は半透明だから向こう側が見えるのだ。

コンビニ弁当、食うのやめよつかな。

醜悪な魔物のせいで食欲は失せていた。

更に10分後。

「生きて帰れんのかな？」

不安になつてきた。

障壁は破られない筈。でも、ずっと閉じこもつていたら恐らく餓死する。

それまでに助けが来るか？

兎も角、何時まで籠城するかは分からぬが、食料はコンビニ弁当一つ。飲み物は家にあるからと買わなかつた。
うーん、喉渴いた。

それより、暇だ。

食料問題とか考えて氣を紛らわそうとしてみたが喉が渴いただけ
だつた。

そろそろ本気で暇になってきた。

よつて

脱出を試みる事にした。

突然だが、ここで俺の障壁について少し説明をする。

障壁は俺と相対的な位置に出現し、どんな力が加わっても動かない。
だが逆に、俺が動けば相対的に障壁も動く。

そこで俺は思いついた。

障壁ごと駆け抜け、魔物を搔き分けて逃げよう！

脱出作戦決行！

更に更に10分後。

結論から言うと駄目だった。

俺がいくら逃げても、足の速い、もしくは飛べる魔物が追いすが

つてきて魔物の群れから抜け出せない。

それに、今もそうだが、何百匹という魔物が障壁に張り付いていて周りが見えづらい。結果、沢山走ったのも公園の中をぐるぐるしただけだった。

「マジで無理かも。、 つて、あれ？」

軽く諦めムードになりかけた時だった。

俺の目が信じられない光景を捉えた。

少女が一人、公園の入り口に立っていた。それも、かなりの美少女。今は美少女とか気にしている場合じゃないか。

髪は水色のショートヘアで、おとなしそうな整った顔に眼鏡をかけた、線の細い華奢な体型の少女だ。

と、つい少女の観察をしてしまったが、俺はそこで重大な、しかし至極当然の事に気がついた。

あの娘危なくね？絶対魔物に狙われると思う。

すると

「グララララ！」

「キシャー！」

「ブモオウ！」

俺が恐れた通り、魔物達が少女に気づいてしまった。そして案の定、魔物達は少女に襲いかかっていった。

少女の姿が魔物の群れに埋もれて見えなくなる。俺は最悪の状況を予想し、思わず目を閉じた。

しかし直後、俺の予想は見事に裏切られた。それも、予想だにしない方向に。

ドツガアアアアアアアアアアアアアア！

轟音が鳴り響いた。

というか今の、魔物が出す音じゃないよな？
ということは

恐る恐る田を開く。

するとそこには荒野、いや、焦土が広がっていた。
そこに1人立っている少女。

この事からわかるのはただ1つの事実。

あの少女が一撃で数百匹の魔物達を消し飛ばしたという事。

「どんだけ強えんだよ」

思わず驚きが口からもれてしまつ。

それ程圧倒的な、理不尽な強さだった。

少女の攻撃はほとんどの魔物を消し去つていた。

あまりの驚きに気付くのが遅れたが、俺の周りの魔物達も1匹残らずいなくなつていた。

というか、俺もこの防護壁が無ければ消し飛んでたよな？

少し恐ろしい想像に軽く身震いする。

そんな俺の事に気付いているのかいないのか、少女は俺に見向き

もせず、真っ直ぐ門に体を向けた。

「ゲート、補足。目標、破壊します」

少女が喋った。

声も可愛え！ じゃなくて、ゲートって言つたな。やつぱりあれは門なのか。

「攻撃、開始」

少女は、そう言い右の手の平を突き出す。

直後、

ドガーン！ズドオン！ズジャー！

俺の拙いボキヤブラリーで言つとそんな感じに、少女の手の平からビームが何発も放たれた。

ビームは俺の障壁に似た色をしていたが、防護的な俺の能力と比べると随分暴力的だ。

先ほども同じ様な攻撃を放つたのだろう。魔物達を一撃で消し去つたのも、これを見れば納得出来る。

そのビームをもろに受けた門、ゲートといったか。まあ、そのゲートの方は、勿論耐えられる訳もなく消し飛んだ。

周りを見ると、何とか生き残っていた魔物達が塵になつて消えていった。

ゲートが無いと生きていられないのだろう。

「破壊、完了しました」

少女はそう言った。恐らく先ほどからのも念め、マイクか何かで報告してくるのだ。「。

かつこじー。それに美少女（そらそろじつといか？）。

その様な事を考えて見てみると、少女はこちりに歩いてきた。

「

少女は俺の田の前に来ると、じーっと俺の顔を覗き込んできた。

俺は何か言おうと試みる。が、何と言えば良いのか分からぬ。じつじょべ。

。

そうだ。

とりあえず、まずは助けて貰つたお礼だ！

「ありがとな」

「

しかし、少女は何も言わない。
これでは間が持たない。

どうしようかと考えていた時だった。

ブロロロロロロローラー、キイ。

公園の入り口近くに黒いボックスカーが止まつた。少女は車の方を見て、再びこちらを向いた。そしてようやく口を開いた。

「 つこしてきて下わー」

「 へ?」

いきなり言われた事が理解出来ず、一瞬戸惑つ。すると少女は俺の手を引いて歩き出した。

「 えつ?ちよつ、まつ」

強引に引っ張られ、ボックスカーの近くまで来る。

「 待つていて下さー」

やうやく少女は車の中にいた人と何か話しあした。しばらくすると、少女は車のドアを開けた。

「 さあ、早く」

乗れといふ事か?

躊躇していると、再び手を引かれて車の中に乗せられそうになる。

「 俺、帰れんなきゃ いけないから」

仕方がないので、そう言つて逃げようとしたのだが

「つ！」

少女がその細い腕からは考えられない様な力で俺の手を掴んでいて離れない。

「たゞすけて〜〜

結局、車に乗せられてしまった。

特殊部隊GSSSC 秘密組織って本当にあるんだ！？

数十分後、どこかのビルについた。
見た限りは変わった所はない。よくある普通のオフィスビルの様だ。

「ここは？」

「ゲート破壊工作特殊部隊GSSSC、日本支部本部です」

「はい？ ゲート 破壊？ 特殊部隊？ えええ。
なにそれ！？」

俺、混乱の極み。

無駄に長い名前の、よく分からぬ場所に、理由も知らされず連れてこられたこの状況。

なにこれ！？

俺の混乱をよそに、少女はビルへと入っていく。
もうここまで来たら行くしかないよな。
俺も覚悟を決める事にした。

俺は少女に続いて自動ドアを通りビルへと入る。
と、そこで、少女に声をかける者がいた。

「あっ、ＺＯ・Ｚ。任務は終わつ 、つて、え？修治！？」

ところが、話の途中でいきなり俺の名前が出てきた。

俺は反射的に顔を上げ、相手の顔を見る。

つて、光？

そこに居たのは俺の幼なじみの少女、朝霧

光だつた。

光とは小学校入学当初からの付き合いでけつこう仲がいい。

外見的特徴を言つと、髪型は腰まで伸びた黒髪、顔立ちは大和撫子といつた様で和風の美少女だ。

そこまでは良かつた。

そこまでは俺の知つてゐるいつもの光だ。

だが、目の前にいる光は何故か巫女服を着ていた。

何故に巫女服？それにここ神社じゃないし。

まあ可愛いからいいか。可愛いは正義！

そう言つて許せる程に、光に巫女服は似合つていた。

話が脱線した。

それより、何で光がここに？

「何で修治がここにいるの！？」

思つていたのと同じ事を言われた。

まあ、この状況なら誰だつてそう言つだらうな。

それにもしても、大して動じてない俺すゞくね？

短時間に沢山驚いたせいで驚きに對して免疫が出来てるのかもな。

だからもう、光がここにいるという事実を受け入れるだけだ。

だが、光はそうはいかなかつたらしい。

「どういふことなの、Ｚｏ・Ｚ！？」

少女に対して凄い剣幕で問う。

しかし、それに対し少女は少しも表情を変えずに答える。

「作戦中にこの方から強力な魔力を感知しましたので、隊長に報告するつもりで連れてきました。 では、急ぎますので」

そう言い、少女はスタスターとエレベーターの方へ歩いていった。

それをぼけーっと見ていると光が俺に言った。

「ほりひ、あんたも行くのよー・話は明日聞くから

「えつ？ ああ 分かった」

光に言われて気付いた。
俺も行くんじゃないか。

少女の後を追いかけ、俺も急いでエレベーターの方へ向かう。

少女について行くと、扉からして他の部屋とは違つと分かる部屋の前に着いた。

中には恐らく組織内でもけつこう位の高い人だらう。

こんこん。

少女が扉をノックする。

「どうぞ」

中から返事があった。

誰なのか聞かずに入室を許可するとは、よほど組織内の人達を信頼してるんだな。

もしくは監視カメラで見ているか。

部屋に入ると、中は社長室の様な雰囲気（あくまでも“雰囲気”だ。実際に社長室なんて見たことないからな）になつていてまたまた社長の様な雰囲気の人が座っていた。

その人は20代くらいの男で、イメージ的にはやり手青年実業家といった感じだ。

男に向けて少女が話し掛ける。

「対魔法生物殲滅兵器アンドロイドーネ・フ、帰還しました」

「アンドロイドー・ホアヒコ、この事については後で聞いてみるとよい。」

「お帰り、フ〇・フ。それと そちらの方は?」

男が少女に言葉を返す、更に俺の方を見て問い合わせる。

「おはようございますと挨拶しなければ。」

「おはようございます、富野 修治と申します」

キリッと、格好良く言った筈。

それに対しても反応は

「はい、じよばんは。

つけの職員じゃないよね？」

微妙だあ―――！

凄い微妙な反応帰つてきた！
がつくり。意氣消沈。

「作戦中にここの方から強力な魔力を感知しましたので、隊長に報告するため連れて来ました」

俺の落ち込みはいざ知らず、少女は男（隊長らしい）。これからはやつ呼ぶようにじよ（ひ）に光にしたのと同じ報告をした。

「さうか、ふむ」

隊長はそれを聞き、少し考える。
そして、真っ直ぐに俺を見てきた。

その表情は真面目そのもので、場の雰囲気が一気にかたくなつた。
重苦しい沈黙。

そして男が口を開いた。

「面倒くさい説明は省いて单刀直入に用件を言わせてもうつよ、富

野 修治君」

「いや、説明はして下さこ」

「

――沈黙。

隊長は露骨に嫌そうな顔をした。

俺は悪くないよな？

誰だつて説明なしで判断などできない。説明を求めるのは当然の事だ。

それに、隊長、面倒くさいって言つたよな？ただのわがままじやねえかっ！なんか俺の方がわがまま言つたみたいになつてるけど。

「しょうがないな、じゃあまずは説明から始めるよ」

今、しょうがないって言つたよ。ビルまで面倒くさがりなんだよこの人。

「ん~、まずこのビルだけど、ゲート破壊工作特殊部隊GSSC日本支部本部として使わせてもらつてる」

これはさつき少女からも聞いた事だ。

「ところで、N.O.Tが連れて來たつて事は君も何か力を持つているのかな？」

力つていつたら、障壁精製のことだろう。

「はい」

答えるが隊長に反応は特にない。

俺がYessと答えると分かつっていたのだろう。

「それで、君も見たんじゃないかな、大きな門と魔物、もしくは魔物だけでも」

「見ました」

「そうか、良く生きていたね。あの位の大きな門になると出て来る魔物も強いからひつの戦闘員でも3人位で壊すのに」

「マジ?」

実はそんなヤバい状況だつたのか。

兎も角、と、隊長は話を続ける。

「我々は、その門と魔物達を殲滅する事を仕事、いや、責務としている」

「どうか、この組織があるから今まで俺達一般人は被害も無く、知りさえしなかつたのか。」

しかし 、と、そこで少し悔しそうに隊長が話しだした。

「しかし 我々は未だ、魔物の行動目的やゲートの出現場所など多くの事が分かつていない」

隊長はそこで一旦話すのを止め、言いつづらうに続ける。

「ただ、最近になって分かつてきただが、魔物は君の様に強い多くの魔力を持つた人に惹かれている事は分かつていてる。だからこれからも君の周りではゲートがひらくだろう」

これで大体話が読めてきた。

ゲートの開く場所をある程度把握し、ゲートと魔物を殲滅するた

めに俺にこのGangとこう組織に入れとこつもつだらう。

とりあえず今は先手を打つておく事にするか。

「だから、俺にもこの組織に入れと？」

「うう言つと、隊長は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに元に戻つた。

「最近の子は頭の回転が早いねえ、話が早くて助かるよ。ここ最近、魔物達をが活発化してきてね、我々としても戦力は多い方がいいんだ」

正直言つて迷う。

戦えるのに戦わないのは怠慢言だらうか。

俺も人類を守るというのは憧れる。だが、これは現実だ。戦いの最中で死ぬことも有り得る。

俺は――、

「考え方させて下さい」

決断はできなかつた。

この場で簡単には決められない。

すると隊長は少しがつかりした顔をした。

「さうか、やはり今すぐつてのは無理か。じつくり考えてくれ。じやあしばらく、護衛を兼ねた監視役を派遣しよう」

「監視役？」

「ああ、今後君の言動には少し制限がつべ。ここでの事やゲート、魔物の事は喋つてはならない」

思えば当然の事だ。機密組織なんだし。
それにしても、監視役とはな。誰だろう、光かな？

「話は以上だよ。遅くまで済まなかつたな。ノーブ、彼を送つて行つてやつてくれ」

「了解しました」

俺は少女の後をついてビルを後にした。

ビルから出ると少女は「ひらり」と振り向きもせず、スタスターと歩いていってしまう。

俺も慌てて追いかける。

こうして俺+同行者は家路についた。

スタスター。

少女はただひたすら歩いている。

GSUのビルからここまでずっとこの調子で、無言で歩いてきた。

正直言つて氣まずい。

何か話題が欲しい。

「なあ」

とりあえず話し掛けてみる。

英語の先生が言っていたが、海外旅行をしたらとりあえず外国人に話し掛けてみるべきらしい。いざ話せば、話す事は後から幾らでも浮かんでくるという事らしい。

しかし、

「何ですか？」

「あ、あのさ、あの……」

何も浮かばなかつた。

「…………？」

少女が不思議そうに聞いてきた。
ええっと、話題話題。

あ、そうだ。

「俺、本部のビルの場所とか見たけど、帰り田舎しとかしなくていいのか？」

ふう、なんとか思いついたぜ話題。

「何故ですか？」

「いや、口外したらままずいだろ？」

俺がそう言つと少女は小首を傾げ（可愛えー）聞いてくる。

「口外するんですか？」

そりへるか。

「いや、しないけど」

「なら大丈夫でしょう？ それに」

何この無償の信頼！

嬉しいけど、こんなにあっさり信頼されちゃつていいのか？

あれ、でも今、それについて言つてたよな。

嫌な予感。

恐る恐る聞いてみる。

「それに、何？」

「それに 監視役も付いていますから

ガツデューネーム！

信頼されてねえ！

それに怖えよ！ 新手の脅しかつ！

スタスタスタスタ。

そしてまた無言。

この空気なんか嫌だ。

スタスタスタスタ。

何か話題 は、もういいか。

スタスタスタスタ。

あ、家の近くだ。

「家の近くまで来たからもういいよ、ありがと」

「そうですか、分かりました。では、某はこれそれがしで

ん？某と言つたか。古風な一人称だな。

そういうや、この娘の名前知らないや。

「ちょっと待つた

帰るうとする少女を呼び止める。

「そういえば自己紹介してなかつたと思つてさ、俺の名前は富野
修治」

「知つています。先程、隊長に名乗つていたのを聞きました

知つているのなら形式的なものとして受けとめてくれれば良かつ
たんだが。

「君の名前は？」

そう聞くと少女は一瞬、迷う様な、躊躇う様な素振りを見せ、そ
して俺の問いに答えた。

「某は名を持ちません」

特殊部隊GSSSC 秘密組織って本当にあるんだー? (後書き)

1話、2話が短かったのに対し、3話は少し長めになりました。
4話は少し短めになる予定です。

機械少女と名前 名付け親は俺！？

「某は名を持ちません」

その言葉の意味をすぐには理解できなかつた。

名前を持たない人などいない筈だ。そもそも名前が無ければ戸籍登録さえできない。

「それってどういっ

俺がなんとか疑問を口にすると少女は答えた。

「某は人ではないので名を持ちません。機体名ならあります。機体名は“対魔法生物殲滅兵器アンドロイドーネ・フ”です」

少女が更に口にした事は俺の疑問を増やしただけだった。
どういう事だ？全く理解できない。

「とりあえず聞くか。
考えても分からない。」

「人じゃないとか、機体名とか、どういいう事だ」

「それは――、

少女は自分について語り出した。

話は1時間程続いた。外で立ち話するには少々長い時間だった。

聞いた話を要約する。

今もあまり居ないが、元々GSSCにはほとんど戦闘員が居なかつた。

そこで出た改善案の一につき、ロボットに戦わせるというものがあつた。

そして、試作機のN.O.・1、N.O.・2が作られた。それらはあくまでも試験用^{プロトタイプ}で、実戦には向かなかつた。

その後戦闘に特化させたN.O.・3、N.O.・4が作られた。それらは普通の相手ならば、単騎で一個師団を10分で壊滅されられる程の実力があつた。しかし、魔物には勝てなかつた。

そして、研究員達が自棄になつて極限まで強化したN.O.・5。その作成の為に兵器に関する国際禁止条約の7割を特例で無効化したそれは、単騎で大陸1つ滅ぼすとさえ言われた。

人類の技術の粋たるN.O.・5は、ゲートを2つ破壊する事に成功した。しかし、3つ目を破壊する際に強い魔物が現れ、激闘の末に破壊された。

その時の魔物を見て、司令部の人々が口を揃えて「 悪魔かつ！」と言つたらしい。

悪魔じやなくて魔物なんだけどな。

これ以上のものは作れないと言われたN.O.・5でさえ勝てなかつた為、ロボットでは魔物には勝てないと考えられ始めた。その後、ロボット計画自体が諦められかけていた。

そんな時だつた。“魔力”の発生方法が発見されたのは。

これまでのデータから、魔物に有効打を与えられるのは魔力を使った攻撃だけだと分かつている。

そして当初は魔力を持つのは人間だけで、能力を使い戦闘ができるのは強く多い魔力を持つ者だとされていた。

後半はあつてはいる。だが、前半は違つた。魔力を持つのは“人間”に限らず“心を持ったもの”だという事が後から分かつたのだ。

そこからは早かつた。僅か1ヶ月で“心を持つ”人口知能が開発された。

それはすぐさま軽量化され、ロボットに搭載された。ロボットは感情面の関係で人型となつた。

こうして、歴史上初の心を持つロボットが作られた。それがN.O.^{A.I}6。

凄まじい発明だったが、N.O.6は軍事最高機密として公開されなかつた。

N.O.6はロボットにして“心”を手に入れた。

だが、最初は能力を使えなかつた。

魔力が少な過ぎたのだ。

結果としてN.O.6は改良を施され、人為的に魔力量を増やされる事で能力を使えるようになつた。

そして、N.O.6のデータを元に戦闘用に作られたのがN.O.7。この少女だという。

これで謎が解けた。

隊長と話した時アンドロイドとか言つていた理由も、ようやく分

かつた。

それにしても、にわかには信じがたい話だ。
だが、幾ら信じがたくともこれが真実なのだろう。

それと、少し気になつた事があつた。

「なあ、俺達と同じで心があつて感情があるんだろ? だつたりと、
名前が無くていいのか? 欲しくなんないの?」

正直、失礼な質問だと思う。だけど俺は、思つた疑問をそのまま
伝えたかつた。

そして、正直な気持ちを答えて欲しい。

すると少女は、少し考えるよつにした後、俺の問いに答えた。

「分かりません。心はあります。感情もあります。ですが、それが
どの様なものか分からぬのです。だから某は、名前が欲しいのか
欲しくないのか分かりません」

自分の気持ちが分からぬ、か。

それはどんな事だろう?

嬉しくても嬉しいと分からぬ。頬を伝う涙の訳も分からぬ。

俺も自分の事ではないからほつきりとは言えないが、それはきつ
と寂しい事だらう。

できる事なら、この少女に“気持ち”を知つてもらいたい。沢山
喜んで、沢山悲しんで欲しい。まあ、悲しみは少ない方が良いが。

決めた。

俺はこの感情を知らない少女に本当の“心”を知つてもらひ。

そのために今できる事をしよう。

「そうか。 でも多分、名前があつたら嬉しいと思つ。別に嫌ではないだろ?」

「はい。嫌では ないと思います。もしかしたら、嬉しいかもしれません」

「じゃあさ、俺が考えてやるよ、名前。いい?」

「貴殿^{あなた}が名前を? 变なのは嫌ですよ?」

「ああ、任せる」

名前か どんなのが良いだろうか。

そうだ、ノ・ヲ・フだから

「ナナつてのはどうだ? ノ・ヲ・フだからナナ。そのまんまでいいかな?」

「 ナナ。某の 名?」

少し不安そうに確認をとつてくれる。

俺は出来るだけ頼もしそうに一言答える。

「ああ」

俺がそう肯定すると、ナナは、花の様な とまではいかないが 確かな微笑みを浮かべた。

感情が分からぬとか言ってたけど、十分笑えるじやん。

「じゃあ、またな。ナナ」

「はいー。」

名前で呼ぶと更に嬉しそうにして帰つていった。

そして俺も帰路へついた。

> i 3 5 4 3 1 — 4 4 6 1 <

死を呼ぶ力 非情な現実と確かな覚悟

あの日から数日、何もなかつたかの様に普通の日が続いた。

光に教室で会つた時に巫女服について聞こつとしたのだが、「なあ、この間の巫女ふ^{ブレッシャー}」と言つた所でこの世の者とは思えないほどの圧力を放ちつつ睨まれたので聞くのは止めた。
いや、あれはマジで怖かった。

そして、あつという間に2週間が過ぎた。

あの日からちょうど2週間と1日たつた今日。現実、俺は寝坊して遅刻しそうになつていて。とはいえる、ギリギリだが一応学校には着いている。あとはHホームルームRまでに教室に滑り込めばOKだ。

という訳で教室へと急ぐ。
と、そこで異変に気づいた。

教室の方がやけに騒がしい。

学校なのだから多少騒がしくともおかしくはない。だが、今日の“騒がしさ”は何時もどこか違つた。

何とも言えない不安に搔き立てられ、教室へ向かう足が早まる。教室へと近づくにつれ喧騒は大きくなつていく。

そして、俺の耳が悲鳴を捉えた。

ふざけた悲鳴ではない。心の底から恐怖した様な、そんな悲鳴だ。

これはただ事では無い。

そう判断し、教室の方へと駆けだした。

いや、駆けだそうとした。

しかしすぐに俺は足を止めた。

何故なら、教室の方から大量の生徒が一気に走ってきたからだ。

あれは、逃げているのか？

沢山のクラスメイトが駆けてくる。

「おいっ！何が起きた！？」

叫ぶ様にして問い合わせる。

そうでもしないとの状況では聞こえない。

「ばっ、化け物が出て、それでっ！逃げ遅れた奴をつ！お前も、早く逃げる！」

クラスメイトの加藤という男が答えてくれた。
そしてすぐに脱兎のごとく駆けて逃げていく。

今、加藤が言った“化け物”といひ言葉。
思い当たるのは一つしかない。

恐らくは、

——^{化け物}魔物の事だろ？

「ちくしょうつー！」

思わず悪態をつく。

何で、何で今日なんだ！
何で俺が遅刻した日につ！

恐らくもう何人かは死んでいる。

俺がいたとしても守れたかどうかは分からない。
だが、守れたかもしれない。

しかし現実として俺は遅刻し、クラスメイトを守れなかつた。

後悔の念に駆られながら、もう人気のなくなつた廊下を駆け抜け
る。

目的はなかつた。ただ走る。
もう何も考えたくなかつた。

曲がり角を曲がる。

「つ！」

そこで思わず息を呑む。

そこには、地獄が広がつていた。
まず最初に感じたのは、吐き気を催す様な濃厚な血の匂い。
そして、床に横たわるクラスメイトの死体。
顔が原形を保つていて確認できるのは3人、かなり仲の良かつた
奴もいた。

皆、体中食り喰われた様に千切れていった。

友人の側に膝をつき、瞼を閉じさせた。

恐怖に染まつたまま、もう動かない目を隠す様に。
俺にはもう見ていられなかつた。

「喜多　　、浜路　」

友人達との思い出が脳内にフラッシュバックする。
そして、目の前の友人達の姿が目に映った瞬間——、

俺の中で怒りが爆発した。

まるで、火山の噴火の様に。

悲しみ、後悔といった感情など塗りつぶして、俺の心の中を憎しみ、憤怒といった感情で埋め尽くした。

そして俺の下した決断。
友の死を背負う覚悟。

魔物共を一匹残らずぶち殺す。
それ以外は考えられなかつた。

死を呼ぶ力 非情な現実と確かな覚悟（後書き）

すいません！

5話の更新地味に遅れました！

さて、それと報告です。

4話にナナのイラストを載せましたー！（パチパチー）

是非、見て下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5528y/>

GATE

2011年11月21日12時30分発行